

ミカは、紀元前8世紀後半に活躍した南のユダ王国の預言者です。ミカと同じ頃、北のイスラエル王国ではホセアが、ユダ王国ではイザヤがエルサレムで活躍していました。ミカはユダ王国の終わりが近づいていることを肌で感じ取った人であったと思われます。ミカ書はミカの名を冠していますが、彼自身にさかのぼる預言は少なく、むしろ、捕囚期以降の匿名の人々に由来する言葉と共に、ミカの預言を編集した文書です。ミカは一貫して神さまの裁きを語りましたが、その中に復興を語ったのです。「神さまの裁きがやって来た時にも残される者がいる。神さまが残りの者を呼び寄せ、羊のように囲いに入れて、牧草地にいる群れのように一つにしてください。彼らは数が増えてざわめく。羊飼いが囲いの戸を開けると、囲いの中の羊は門を通り外へ出て行く。その王が彼らの前を、神さまがその先頭に立って行く」と語ったのです。

「残りの者」は国家の危機、信仰の危機の時に、むやみに外国を頼ったり、外国の神を礼拝するのではなく、ヤハウェを信頼して神さまの働きを待つ人のことです。旧約聖書における重要な概念です。創世記の「洪水物語」に典型的に見出されます。ノアをはじめその家族と動物たちは僅かですが、残され生かされたと記されています。預言書では、神さまの裁きによって人々が滅亡するとき、かろうじて残る少数の人のことを指します。そして、それらの人たちが神さまの裁きを乗り越えて、神さまの憐れみとそこに見出される希望の徴となることを言います。私は今日の箇所を読んだ時、出エジプト記の神さまがイスラエルの人々の先頭に立って導く場面を思い起こしました。人々が雲の中にいる神さまに従う時、神さまは荒れ野を旅する人々の先頭に立って出エジプトを導いたと記されています。

今日の箇所は、ミカの預言を伝える人たちが、捕囚時代を生きる中で、神さまへの信頼を失わなかった「残りの者」を、神さまが先頭に立ってエルサレムへ帰還を導いて下さるという希望の言葉として、書き加えたものです。ユダ王国は、ミカの預言から約150年後、紀元前587年にバビロニアによって滅ぼされました。政府の高官や知識人はバビロンに捕囚として連れて行かれましたが、彼らはやがてバビロンに同化し、信仰をなくしていきました。しかし、それでも残りの者となった人々が、信仰を継承していき、70年後にはエルサレムへの帰還を果たしたのです。その後、イスラエルの地はペルシアからアレキサンダーのギリシアへ、ローマ帝国へと支配者が変わっていきました。そして、今から約2000年前に生まれたイエスが全く新しい意味で神さまの支配を私たちに告げたのです。